

豊かな学びを育む 総合活動をめざして

～活動を生活にする～

長野県伊那市立伊那小学校

いとうみちひこ
伊藤道彦

【実践の内容】

本校では『児童によって児童のうちに建設される教育』を具現するため『内から育つ』を研究テーマに総合活動を教育課程の柱にし、子どもと教師が学習を創り出すことを大切にしている。それは、総合が子どもたちに「豊かな学びを育む」と考えるからである。この考えに立ち、1年生から3年間やぎと共に生活してきた子どもたちの姿から、日常の中で育まれてきたもの、特別なできごとと出会うことで育まれたもの、やぎとの生活から広がる教科的な学びの三点について考察を行った。

【論文内容の紹介】

1 活動の概略

1年生の8月からメスやぎのメイちゃんと生活を始めた子どもたちは、赤ちゃんを生んでもらいたいと願い、オスやぎのメイすけをもらってきた。2年生の6月に待望の赤ちゃんが誕生し、その後乳搾りや乳を使った調理活動を行った。翌春には2頭のオスやぎが生まれ、5頭のメイメイ家族のお世話や乳搾りをしたり、調理をしたり、遊んだりしている。

2 日常の中で育まれてきたもの

毎日、餌やりや掃除、スキンシップや散歩など積み重ねていくことで、初め恐がっていた子どもも触れるようになり、自信や自己有能感を味わっている。子どもたちは、毎日かわるなかで、やぎ一頭一頭の性格や行動が分かり、自分自身のことも分かるようになり、どのようにかかわればいいのかをからだで感じ取っている。だから、無理をせず自然体でメ

イメイ家族とかかわっている。子どもたちの心とからだがなじんできたのだと思われる。

また、毎日の世話や調理活動を繰り返すうちに、子ども同士、分担したり指示したりすることなく、友だちの動きを見て自分のやることを決め、互いに動くようになってきた。自分は何をするのか自分で考えて行動する自立的な育ちと共に、友との協働の中で共感的な感性が育まれてきたと思われる。

3 特別なできごとと出会うことで育まれたもの

やぎと共に生活をするなかで子どもたちは、出産や病気という特別（非日常的）なできごとに出会ってきた。出産を目の当たりにした子どもたちは「がんばれ」と応援しながら号泣した。命の尊厳、命への畏れを全身で受け止めた瞬間だったのだろう。また、一番元気なメイすけが突然腰まひという病気になり立てなくなる姿を見て、死という不安に襲われ「生きて」という心からの叫びを生んだ。

このように非日常的なできごとに出会うことで、子どもたちは情意を激しく揺さぶられ対象への思いを深めていった。同時に、子ども同士の心と心が結びつき、共に学ぶことへの思いを深めていったと思われる。

4 やぎとの生活から広がる教科的な学び

やぎとの生活は、乳の量を量ったり分けたり、あるいは乳の量をグラフに表したりするなど、様々な活動を生み出した。必要感があるので子どもたちはとても自然に、かつ意欲的に活動した。また酪農へと学習が広がった時、自分たちのやぎと比較し相違点を見出すなど、やぎを通して酪農を理解していった。

5 研究の総括

やぎとの生活は、子どもたちに自己肯定感や感性、命に対する畏れなど豊かな学びを育んできた。また学級の強い絆も生み出した。やぎとの活動が子どもの生活になり、子どもたちは自ずと「内から育った」のだろう。